

〈研究ノート〉

濱口梧陵と海を渡った先駆者たち

白 岩 昌 和

一、はじめに

安政元年（一八五四）の津波から村人を救済したという美談によって小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）に「生神」と称賛された濱口梧陵（二八二〇～一八八五）。その人命救助の功績は、「津波防災」の手法として戦前の国語読本に掲載された「稲むらの火」〔中井常蔵氏作〕の主人公である「五兵衛」を通して現在も語り継がれている。しかし、梧陵の社会貢献は多くの人が知る防災に限定されたものではない。生誕二百年を二〇二〇年に控え、本稿では、杉村楚人冠によって著された『濱口梧陵伝』¹（以後、『梧陵伝』とする）では殆ど語られていない梧陵と共に渡米した人物や梧陵の渡米を支援した現地の領事などを紹介することで、梧陵の果たそうとした日本の近代化について考えてみたい。

二、開国前後の海運と産業の推移

二〇一九年七月、商業捕鯨が三十一年ぶりに再開された。歴史的には、梧陵の生誕地である紀州の広村(現在の和歌山県広川町)出身の先人も、五島列島の有川湾で捕鯨が盛んになるきっかけを作ったとも言えるようだ⁽²⁾。また、南房総の和田浦も捕鯨に関わってきたが、そのルーツは南房総との地名の共通性からも紀州との関わりが想像できる。⁽³⁾『銚子木国会史』の序章「紀州人と初代漁業」には、應承二年(一六五三)に紀州の青野五右衛門なる者が漁夫多数を引き連れて来て鯨などの漁をしたことが記されている。その後、慣例となっていた「春来て、秋帰る」という漁の生活から、正保二年(一六四六)に梧陵の先祖が銚子で醤油醸造を始め、明暦二年(一六五六)に外川の築港を崎山治郎右衛門が始めたことで、広村から銚子への移住が始まることになる。

十八世紀後半には欧米でも、鯨油は蠟燭の原料、灯油、機械油(特に、船の燃料)として、最も重要な燃料資源、生活物資であったことが知られている。そして、その状況は、一八五九年八月にエドウィン・ドレイク(Edwin Drake)によってペンシルバニア州で石油が発見されるまで続くのである。⁽⁴⁾中濱萬次郎を救助したジョン・ホーランド号のホイットフィールド船長の出身地マサチューセッツ州フェアヘブンなどからも大型捕鯨船で良質の鯨油を産することで知られるマッコウ鯨を追ってアメリカ人が常陸、三陸沖まで漁に来ることになったのが一八二〇年代以降と言われる。⁽⁵⁾アメリカの捕鯨船は母港を出てから漁を終えて帰港するまで三、四年を要したことを考えれば、ペリー提督が来航し捕鯨船の補給基地として日本に開国を要求したことも理解出来る。

では、当時の横浜から桑港(サンフランシスコ)までの航行時間はどのくらいだったのだろうか。梧陵より一船早く渡米(一八八四年五月十三日サンフランシスコ着)した陸奥宗光と紀州からの留学生が乗船したのが「オーシャニ

ック」号である。また、明治九年（一八七六）には、佐藤百太郎が募集した「米国商法実習生」(この一団は、「オーシヤニック・グループ」と呼ばれた)を乗せた「オーシヤニック」号が樹立した最短記録についての記事がある。⁽⁸⁾

掲載された記事によれば、「オーシヤニック」号の航海は十四日と十四時間二十分を要したとされる。それまで「(シテイ・オブ・)ペキン」号が持っていた記録(十五日と十二時間)を破ったのであるが、数ヶ月前の同紙の記事にも横浜からの航行時間の記録が記事にされていることから、各船会社或は船員の間では最短航行時間の競争が激化していたと思われる。梧陵らが乗船した「(シテイ・オブ・)トウキョー」号、「ペキン」号、「オーシヤニック」号の船脚では、将来的には十三日も可能と記事は結んでいる。

梧陵の親友である勝海舟と福澤諭吉が咸臨丸で浦賀を出帆してサンフランシスコに到着するまでに要した日数が三十七日であったことを考えると、蒸気船の登場が如何に海外との距離を縮めたのかが分かる。航海術や測量技術の向上もあり、海運の安全性も高まったとはいえ、まだまだ危険を伴う航海であったはずだが、何も梧陵の海外視察という熱い想いを止めることはできなかった。

三、濱口梧陵一行のアメリカ到着

筆者は以前から、アメリカに残された梧陵の足跡を探していたのだが、ようやく梧陵の一行がサンフランシスコに到着したことを伝える記事が見つかった。たまたま、梧陵と交流のあった陸奥宗光のハワイでの療養⁽⁹⁾などに關して調査していた折、Daily Alta California⁽¹⁰⁾という現地の新聞の一八八四年六月十七日付に、次のような短い記事が掲載されているのを発見した。

M. Fujishima, Japanese Consul at Lyons, France, arrived yesterday from Yokohama, by the steamship City of Tokio. Accompanying him is a party of nine, including **a very intelligent Japanese gentleman**, Mr. G. Hamaguchi, and attendants, who is on a tour around the world for the purpose of seeing Western forms of civilization, and especially observing their benefits as applicable to Japan. They intend passing about a week in this city, and will proceed thence to Washington and to Europe.

『**梧陵伝**』に書かれている人物と対比して記事を訳せば次のようになる。

(私訳) 藤島正健フランス在リオン領事は、昨日の横浜からの汽船「**シイ・オブ・トウキョー**」号で到着した。同氏と共に到着した九名は、**とても立派な日本人紳士**である濱口梧陵氏と世界一周巡察を目的とする一行である。特に、文明開化の進んだ西洋諸国で見聞したことが、日本に適用できればとの思いである。一行は、一週間ほど桑港市内に滞在し、ワシントンに赴き、その後はヨーロッパに渡航の予定である。

また、同紙の前日(現地時間六月十六日)付けの記事には、パレスホテル^①に宿泊する一行の名前が確認できる。日

本人名ということもありスベルの間違いが多いが、新聞に掲載された乗船記録と『梧陵伝』の記述と照合し、次の九名であると判断できる。

濱口梧陵とその給仕(橋本佐助、但し宿泊名簿のイニシャルはK)、藤島正健、熊崎寛良、大倉喜八郎、横山孫一郎、高島小金治、金子彌平、鍋倉直

また、天気予報欄や船舶関係の欄に記された情報から、横浜を出港してサンフランシスコ到着まで十六日と十三時間の船旅であったこと、到着した現地の天候は晴れであったことがわかる。これが、梧陵のアメリカ到着の初日だった。

奇遇なことだが、梧陵が乗船した「トウキョー」号で、香港から乗船した中国人旅客に天然痘患者が出ていたこともわかっている。東京大学医学部の前身である「西洋種痘所」再建に関わった梧陵が天然痘患者と乗船することになったのも偶然なことなのか。なお、天然痘に関する知識があった為か、日本人乗客に伝染することはなかった。また、発症の事実を隠したとして、船長が逮捕されている。

以下の節では、梧陵の渡米に同行した人々の足跡について整理する。

三―一、藤島正健

サンフランシスコ到着を伝える記事の冒頭に名前が記されている藤島正健については、複数の国立公文書館デジタルアーカイブ(以後、「国立公文書館」)で公開されている公文書(「仏国リヨン府、領事官派遣之義上申」、1884

年1月、「仏国リヨン府へ領事官派遣ノ件」、『公文録・明治十七年・第二十卷・明治十七年一月～四月・外務省』、国立公文書館、請求番号…公03684100、(九下)などから次のようなことが確認できる。

まず、フランスのリヨン(里昂)領事館への赴任が決まる前の明治十七年二月十六日に大蔵卿松方正義によって藤島の京都、大阪及び九州での任を解く公文書「権大書記官藤島正健京坂ヨリ帰京の件」(1884年2月、『公文録・明治十七年・第二百五卷・明治十七年二月・官吏雜件一(太政官～海軍省)』、国立公文書館、請求番号…03879100)から、大蔵権大書記官という役職にあったことがわかる。その後、同年四月に入り、リヨン在住領事の派遣に関する公文書が重ねて発行されるが、その公文書には着任する人物の名前は記されていない。それらの公文書の内容から、給与などを決定してから派遣する人物を選ぶ形式をとったようだ。

藤島が特別な人物(明治十四年には製紙研究やフランスの万博の視察で欧米諸国に派遣されている)であったのか、或いはフランスの為政者に贈る親書を託されたのかもしれないが、明治十七年(一八八四)四月十五日付の公文書「外務省上申領事藤島正健佛国里昂府在勤ニ付御委任状御下付之事」(1884年1月、「領事藤島正健へ御委任状下付ノ件」、『公文録・明治十七年・第二十卷・明治十七年一月～四月・外務省』、国立公文書館、請求番号…公03684100)には「国璽」という文字が書かれた次のものが付けられている。

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐タル日本國皇帝此書ヲ見ル有衆に宣示ス朕仏蘭西國里昂府ニ領事を在留セシムルコトヲ必要ト慮リ茲ニ藤島正健ノ勉強誠實ナルヲ親愛シ里昂府領事ニ任ス即チ兩國ノ條約ニ從ヒ其地ニ到ル我國臣民ノ權利及商船貨財貿易等ヲ保護スルノ權ヲ授与ス宜ク朕カ(意)ヲ體シ其地ニ到レル我國臣民ニ諭告シ此命令ヲ尊奉セシムヘキヲ命ス故ニ佛蘭西國大統領及官民等藤島正健ノ領事タルコトヲ承允至當ノ需ヲ為サハ之ニ補助ヲ与ヘラレンコトヲ冀望ス

神武天皇即位紀元二千五百四十四年

明治十七年四月廿二日東京宮中ニ於テ

親ヲ名ヲ署シ璽ヲ鈴セシム

御名 国璽

奉勅 外務卿

帰任後の活躍については殆ど情報がないが、ハワイで発行されていた『やまと新聞』（一九〇六年九月十五日付）には、南米チリの鉱山の視察に赴いていたことを伝える記事が掲載されている。

三一、熊崎寛良

外務大臣伯伊藤博文によつて記された明治廿年（一八八七）十月十九日付公文書「外務属熊崎寛良外一名交際官試補ニ被任ノ件」（一八八七年十月二十一日、『公文録・明治十七年・第二十卷・明治十七年一月～四月・外務省』、国立公文書館、請求番号…任A000128100）に付けられた履歴書から、次のようなことが確認できた。

愛媛の宇和島の出身で、翻訳掛別席として明治五年（一八七二）外務省に入省し、明治十年八月には佛國公使館付書記一等見習を申し付けられる。明治十二年十二月には、佛國巴里公使館在勤した。また、明治十七年四月九日付で「佛國里昂府領事館在勤申付候」年棒美貨四百磅とあるという記述があり、五月三十日赴任とあることから、藤島正健と共に現地への赴任の途にあつたと考えられる（明治十九年七月二日帰朝）。

三一三、大倉喜八郎

乗船者の中で最も著名な人物は、明治六年（一八七三）に大倉組という商社を創業した大倉喜八郎だろう。大倉は、大倉組創業前の明治五年からほぼ一年半をかけて、商況を知る為の欧米視察を行っている。興味深いことに、時を同じくして岩倉遣外使節団一向もヨーロッパに滞在しており、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文など明治政府の要人と出会うことになる。大倉自身が述べた『努力』には、次のような面白いエピソード（筆者要約）が紹介されている。

木戸孝允氏、中井弘氏¹²と英国、仏国を経て伊太利へ旅行したが、巴里から羅馬まで実に面白い旅行が出来た。羅馬では有名なコンスタンチホテルに宿をとったが、丁度岩倉大使の一行も泊まっていた、中井氏と二人で尋ねた。正午、大使の一行が午餐を食べようとしていた。岩倉が上席で日本の文武官や外国の紳士達が綺羅星の如くに並んで食卓を囲んでいた。私と中井氏が入って行くと、「どうだ、一緒に食事をしよう」と言われた。

が、食堂は一杯で、着席する所もない。その時伊藤（博文）副使は「此処へおいで」と、直ぐ自身と岩倉との間をあげられた。中井氏は岩倉の隣席へ掛け、私にもその側へと言われたが、余り上席であるから御辞退すると、「ナニ構わない、外に席がないから此処がよい」と言われるので、「それでは旅行中の事故御免を蒙ります」と私もそこに着席した。末席の方にいた連中は妙な顔をして、頻りに何かブツブツ言っている。私が商人でありながら上席へ着いたのを、無礼だとか伝ばしていた。私は聞こえぬ振りをして黙っていると、中井氏がとうと

う怒り出して一切構わず遂にやり出した。「見渡す所、この席上にいる方々は歴代のお役人様ばかり、お役人様は皆大層な月給を取り、その上日当だの手当てなどを貰い、旅費までも頂戴して威張って洋行しておられるが、私の側にいる町人は、自分が粒々辛苦で稼いだ金で洋行しておられる。元より月給もなければ、日当をも貰わない、自腹を切って迄も我が国に尽くそうという、立派な精神を抱いておられるのです」

これで、食堂のお役人を黙らせてしまったという。この話を後日聞いた木戸も「随分面白かったでしょう」と笑ひ飛ばしたというぐらい当時の官民の風通しは良かったのだろう。

大倉はこの欧米視察から帰国後、前述にあるような政府要人との人脈を生かし、明治政府各省への物品を納入する商権を得る。その為に設立したのが大倉組商会で、その出資者の一人が「トウキョー」号の乗船者の横山孫一郎であった。

広く知られているように、大倉が創立し今なお残っている企業には大成建設、サッポロビール、帝国ホテル、帝国劇場、日清オイリオなどがある。しかし、筆者が、大倉に梧陵に通じる想いを感じるのは、明治三十年（一八九七）に、当時の赤坂葵町（現在の虎ノ門「ホテルオークラ」隣接地）に大倉商業学校（現東京経済大学）を創立したことである。「耐久社」を開いた梧陵と同じように、教育機関を創立して教育の普及に努め、現在でも後進の道標となっている。

三―四、横山孫一郎

大倉組商会創立に副頭取として大倉喜八郎を支えたのが、ホテルオークラで支配人を務めた横山孫一郎である。

横山は、上野国（群馬県）邑楽郡川俣村の出身で、祖父と養父は土木事業に従事していた。奇遇なことだが、梧陵について初めて記された「濱口梧陵君伝」が収められている瀬川光行編『商海英傑伝』には「横山孫一郎君伝」も収められている。

その伝記によれば、養父が横浜開港の土木事業に関わることになり、外国語の習得が必要であることを痛感し、品川忠道¹³という人物から外国語を習うことになる。シーボルト¹⁵が横浜に来た時には、当時の英国公使館に要請して日当銀一步で通弁官として勤めている。明治四年、その評判が井上馨大蔵大輔に伝わり、官僚の道に進むこともできたが、実業家としての道を選んだ。明治五年、政府の勧めで当時の大富豪である三井家と小野家の子弟が海外留学しようとした時に、小野家に請われて子弟に随行することになり、明治六年、開催されていたオーストリア・ウィーン万博を視察する機会も得たが、時を同じくして欧州視察に来ていた大倉がスイスの宿泊先まで訪ねてきた。この時、二人は日本経済の発展について語り合い意気投合したという。

外務省のホームページにある「外交史料館」には、明治十一年（一八七八）に吉田正春が特使として選ばれた使節団の一員として横山はイランとペルシャを訪問していることが記されている¹⁶。当時は、石油の採掘はアメリカ国内を中心として行われていたが、これを嫌った西欧諸国が世界各国で石油を探し始めた。一九二〇年代に入ると中東に膨大な石油が眠っていることが明らかになるが、その中心はイランとイラクであった¹⁷。

三一五、高島小金治

通訳として梧陵と行動を共にしていたのが高島小金治である。横山と共に大倉喜八郎との関係が強かった人物でもある。より正確には、梧陵との渡米がきっかけとなり、大倉からの信望を受けるようになる。

『ヤマサ醤油店史』には、梧陵の遺骸と共に一旦帰国していた高島が再び渡米して、梧陵が滞米中にウースターソースを参考に考案した醤油を原料にしたソースの販売に当たったとの記述がある。また、現地での塩詰め作業には、若き日の武藤山治（鐘紡社長）、和田豊治（富士紡績）等が留学生アルバイトとして働いていたようだ（武藤氏が、報知新聞社長として広告主であるヤマサを訪れた時に話したとされる）。当時施行された特許法によって新味醤油として特許第五三号に登録され、日本最初のソースとして業界に先駆けた栄誉を担ったが、梧陵と梧莊（八代目儀兵衛）の相次いで死没によって、その製造及び輸出共に挫折中断したとも記されている。帰国後、大倉組に入り、大倉の三女つると結婚する。

三一六、金子彌平

『梧陵伝』で渡米した梧陵のことを談話形式で伝えているのは、大蔵省御用掛として「トウキョー」号で赴任した金子彌平である。嘗て和歌山県会議事堂構内の一角に建立された梧陵の像蔵の揮毫をした大蔵卿松方正義（『梧陵伝』では、梧陵と共に渡米したことになっているが、乗船及び宿泊名簿には松方の名前は確認できない）による明治十七年五月九日付「金子彌平外國行従者召連ノ儀伺」（1884年5月）、「御用掛金子彌平米国紐育へ出張ニ付従者召連ノ件」、「公文録・明治十七年・第百九十一巻・明治十七年一月～六月・官吏進退（大蔵省）」、国立公文書館、請求番号…公03883100から、十九歳七ヶ月の弟（五男）謹三を伴っての渡米であったこともわかる。

また、「金子彌平紐育へ派出ノ義ニ付伺」（1884年1月）、「御用掛金子彌平米国紐育へ派遣ノ件」『公文録・明治十七年・第百九十一巻・明治十七年一月～六月・官吏進退（大蔵省）」、国立公文書館、請求番号…公03855100には、金子の渡航目的が次のように記されている。

横浜正金銀行ヲシテ取扱ハシメ候海外荷為替ノ義ハ近来正貨取得ノ急ナルヨリ追々上申候通り漸次其取組高モ増加致シ就中米国紐育へ直輸出スル貨物ハ最モ多ク随テ其金高モ亦一ヶ年数百万圓ノ巨額ニ有之而シテ右等為替荷物該地へ到達ノ上其取締方并ニ為替金徴収等我領事一人ニシテ取扱来候得共其事務頗ル繁劇ニ涉リ一人ニテハ手廻リ兼可申候就テハ今般當省准癸任御用掛金子彌平ヲ該地へ派出セシメ専ラ為替ノ取扱方ヲ助務セシメ申度ト存候間前同人該地へ出張ノ義至急御命令相成候様致度此段相伺候也

明治十七年三月十八日

大藏卿松方正義

太政大臣三条實実殿

福澤が金子に宛てた書簡などから、梧陵の渡米の世話を積極的行ったのが同氏であることがわかる。次の書簡⁽¹⁹⁾から、渡米準備として小幡篤次郎⁽²⁰⁾、森村市左衛門⁽²¹⁾などが招集されたと考えられる。

明治十七年五月四日 金子彌平宛

「益御清寧奉拝賀。過日も一寸申上置候通り、御出発も迫り候義に付而者本月七日(午後四時から五時之間)態ト御来光を願度。客ハ小幡、森村、濱口等、六、七名之小集ニ御座候。何卒御繰合御来車奉願候。右御案内申上、御差支之有無、乍御面倒御一報奉願候。早々頓首。

五月四日

福澤諭吉

金子彌平様 梧下」

また、横浜出港直前の五月二十七日には、紐育(ニューヨーク)にあった森村組の村井保固⁽²²⁾と米国留学中の長男一

太郎に宛てた書簡で梧陵の渡米を知らせている。⁽²³⁾

明治十七年五月二十七日 村井保固宛

「(前文略)今便には金子彌平大蔵省の御用にて渡米、是も前年久しく弊宅に居り、賤息共幼稚の時より知る者なり。又濱口梧陵と申人、是は紀州の豪家、財産も澤山有之、身は郷士なれ共、明治の初年には旧紀藩の参事をも奉職し、地方有名の人物、小生は二十年來の相談、立派なるゼントルメンなり。老士老して益盛、今回洋行を存立、金子氏と同道いたし候に付ては、何れ貴社の御約介可相成、夢以市太郎君豊君へも当地にて毎度御目に掛り、百事御依頼申候義、必ず本社より御通知も可有之存候得共、右の御含を以て御世話奉願候。濱口氏は従者一名(佐助と申す忠儀商人なり)、外に高島小金治、書記として付属いたし候。高島も兼て洋行は熱中希望の処、此度こそ幸に志を達し候次第、濱口君は米国にて暑を過ごし、秋涼を待つて渡英、之を根本として諸国を巡視、当冬は伊太利に居て、夫より印度海帰朝、大凡壹年間の漫遊、或は遊びごろが好ければ今少し延びても不苦、又或は面白くなければ早く帰ると申、自由自在なり。依つて案ずるに、米国滞留中は彼のドクトルシモンズ氏杯、日本の事情を知らんとする要あれば、或は氏を東道之主人として米国の事情視察杯、好方便かとも存候。尚御考可被下候。い才ハは本人御目に掛りし上、尚高島氏よりも御相談可申上、何分にも宣布奉願候。早々頓首。」

この書簡にも「二十年來の相談」と記されているように、梧陵の長年待ち続けた海外視察が実現することに福澤が喜び、自身の人脈を使って最大限の支援していることがわかる。同日、一太郎に宛てた書簡は次の通りである。⁽²⁵⁾

明治十七年五月二十七日 福沢一太郎宛

「(前文略)今便には金子彌平氏渡米、日本の事情詳に承知あり度、又兼て貴様の知る浜口梧陵(旧儀兵衛)君が俄に思立、高島小金次(ママ)付属いたし候。何れ面会の義に可有之、随分米国も日本人にて賑々数相成候事ト存候。右要用而已。早々以上。

五月廿七日

諭吉

一太郎殿

金子彌平氏之実弟金子勤三(金蔵)モ、今便兄と同道いたし候。年ハ二十一歳なり。是まで(ママ)本塾ニ在り。此程ハ何れへか転校いたし候哉。手紙を送る二者何と名当して宜しきや、至急報道被致都度。此度ハ森村組村井までさし出置候間、同組より届候義ニ可有之在候。」

幸いなことに、筆者は金子彌平の弟(四男)友之助氏の曾孫である金子宗徳氏からもいろいろと資料を提供して頂いた。『梧陵伝』にも書かれているように「支那通」(英文の支那総論六冊を梧陵に紹介したとある)²⁶⁾であった金子は、梧陵にとって渡航中一番の話し相手だったと推測される。ニューヨークで客死することがなければ、言葉通りインドから中国にも足を延ばしたのではないだろうか。なお、金子は帰国後、主税局酒税課に異動し、正七位に叙せられた。明治二十一年(一八八八)二月二十日、宇佐美延枝と結婚する。和歌山藩士・宇佐美興栄の妹であった延枝は、東京女子師範学校(現お茶の水女子大学)を卒業した後、金沢や東京(麻布英和女学校)で和漢文の教鞭を執った。

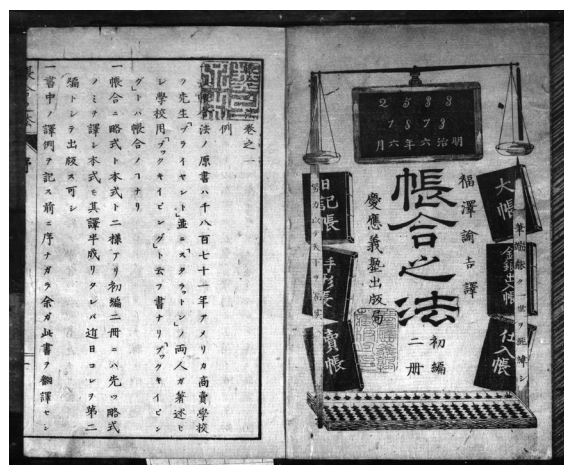
余談ではあるが、弟勤三は紐育在領事であった高橋新吉の薦めもあり、ペンシルバニア州ランカスターにあるフランクリン&マーシャル大学(Franklin & Marshall College)の予科に籍を置くことになる。金子彌平が帰国した後も同校に残り、伝道者の道を選ぶ。在学時に交友を深めたW. E. ホーイ(William Edwin Hoy)と押川方義が創立した

仙台の神学校（現東北学院大学）で旧約学の教授に就任することが内定していたのだが、ヘブライ語などの研究の為に帰国を延ばすことになる。運悪くして、肺の疾患に倒れた勤三は再び日本の地を踏むことなく、その短い生涯を閉じた。

三十七、鍋倉 直

金子彌平と共に海を渡ったのは、後に横浜正金銀行サンフランシスコ支店長となる鍋倉直である。金子の渡航目的から考えて、同氏の任務遂行の為にパートナーとしての渡米だったのでないだろうか。

専門家の評価は酷いが、銀行簿記の実践と隔絶した珍しい本とされる『国立銀行簿記一斑』（明治十二年三月）を著している。その内容から簿記の本としては酷評もされるが、洪沢栄一が序文を記している、銀行簿記の専門家というべき藤尾録郎閣とあることから鍋倉の著書存在は無視できないようである。なお、日本に於ける西洋簿記学の最初の文献は福澤諭吉によって訳された『帳合之法』（初篇明治六年六月刊）である。明治五年十月に大蔵省紙幣寮付書記官として招聘された英国の銀行家シャンド（Alexander Allan Shand）の講述を底本とした『銀行簿記精法』



帳合之法

（慶應義塾福澤研究センター所蔵）

(明治六年十二月刊)が続いて刊行される。

『帳合之法』は、アメリカでチェーン展開されていた商業学校六十校ほどを経営していたブライアント&ストラットン共著の学校用簿記教科書(Bryant and Stratton, Common School, Book-keeping)を翻訳したものである。興味深いことに、福澤訳の『帳合之法』を教科書として使った「簿記」と「商業実践」の授業を行ったのは、初代文部大臣森有礼が明治八年(一八七五)に銀座尾張町に開講した私塾商法講習所であった。そこには、教師として、後に日本銀行総裁となる富田鉄之助が招聘した自身の恩師であるW. C. ホイットニー(William Cogswell Whitney)がいた。

四、 梧陵らに影響を与えた福澤諭吉の世界観

梧陵が渡米する前年に発行された『時事新報』(明治十六年十月五日)に次のような社説が掲載されている。

「内閣諸公ノ洋行ヲ望ム」

(前文略)我内閣中已ニ海外ニ遊ビタル人アリ又未ダ之ヲ為サル、人アリ固ヨリ其既遊ト未遊トニ依テ未ダ遽ニ其人物ノ如何ヲ評スベカラスト雖モ而カモ已ニ久シク外国ニ在テ親シク文明ノ近況ヲ目撃シタル人ト足未ダ海外ノ地ヲ踏マザル人カ仮令ニ之ヲ踐ムモ爾來歲月既ニ久シキ者トハ文明ノ進行ヲ急グノ応ニモ自カラ感覺ヲ翼ニスル所アルヲ免レザルベシ果タシテ然ラバ特ニ欧米諸国ヲ巡遊シテ其実際ヲ視察スルハ随分緊要ノ事柄アリト云テ不可ナカルベシ

この記事は、福澤が特に「政治家」に対して海外視察の重要性を訴えたものであるが、梧陵が渡米する前後には、

その渡米推論は一般の個人に向けたものとなり、多くの留学生が海を渡るようになる。その内容は、今で云うアメリカン・ドリームであり、民主主義・資本主義への期待の表れでもある杜説がその後も続いて掲載されている。一八八四年三月二十五日の「米国は志士の棲處なり」、四月十六日の「富を作るの地を擇む可し」、七月一日の「富喜功名は親譲りの國に限らず」が、それらである⁽²⁸⁾。

なお、廃藩置県前の和歌山藩では、梧陵(当時、大広間席学習館知事)らによって全国に先駆けた近代化の手始めとして洋学所「共立学舎」(明治三年八月二十四日)⁽²⁹⁾が設立されるなどの教育改革が行われ、またロシアからカール・ケッペンを招聘しての兵制改革にも乗り出した。しかし、福澤の招聘に失敗したことで「共立学舎」は、梧陵の思い描いた使命を果たさずに幕を引くことになる。梧陵の渡米には、このような積年の思いが込められていたのではないだろうか。

二〇一七年、耐久高校に蔵書された四千冊に及ぶ「梧陵文庫」の整理作業を筆者も手伝わせて頂く機会があった。その際、「共立学舎」で使用されていたと考えられる慶應義塾読本『英文典』という英文法の初級本が見つかった。この発見からも、福澤と梧陵の英語教育を通しての想いが伝わってくる。⁽³⁰⁾日本の近代化の必要性を感じていた福澤の目には、西洋文物の輸入が喫緊の課題と映っていたであろう。その任務を受けたのが門下生の早矢仕有的である⁽³¹⁾。西洋の書籍、薬品、雑貨などの輸入を手がける丸屋(丸善)が横浜に開業したことが海外から知識を得る転換期だったとも言えよう。

五、 ニューヨーク領事 高橋新吉

残念ながら、梧陵の世界一周巡察の旅も不治の病の為、思い半ばで終わりを告げることになる。梧陵の逝去を伝

える『時事新報』の記事(明治十八年四月二十三日付)は次の通りである。

○濱口梧陵氏 紀伊有田郡広村の豪農濱口梧陵氏は六十余歳の老齡にも似合わず精神の活発なると安政年度生まれの壮年輩をも愧死せしむる程なりしが去年五月急に世界一週(ママ)の事を思立ち東京三田慶應義塾の高島小金治氏を伴い先ず米国サンフランシスコに至り夏の間は専ら其地方を遊歴し秋に入りて東部諸州を巡り其間重もにニウヨーク府を旅寓の本拠と致し居たり然るに前便在米国社友の許より本社に達したる三月十一日ニウヨーク府発の書中に濱口氏は過般來病氣にて臥床し居れり格別の事にはならざれども老体ゆえ兎角用心肝要なるべし氏は全快の上予期^の如く欧州へ赴くつもりなれども旅中過勞の恐れもあるゆえ一先ず日本へ帰る方よろしからんと忠告し置きたりとあり其後氏の留守宅よりも帰国を促がす書信を送りたるよしに伝聞志(ママ)たりしが昨朝左の凶聞在ニウヨーク府の高橋領事より氏の留守宅へ達したるよし実に氣の毒なり

四月廿一日ニウヨーク発電報

濱口氏今朝死去遺骸ハ次ノ郵船ニテ送ルベシ

『梧陵伝』には、梧陵の滞米中に「百般の斡旋をなし居たる」人物として、九鬼隆一特命全權大使の名前が記されている。しかし、九鬼は首都ワシントン^をを拠点に行動をしていたことから、ニウヨーク滞在中の梧陵らの世話を實際にしていたのは、記事にあるように梧陵の計報を留守宅に伝えた「高橋領事」であったと考えられる。

「高橋領事」こと、高橋新吉に関して知る人は殆どいないのではないだろうか。筆者は、次のような経歴を持つ高橋に最も興味を惹かれた。

慶応元年(一八六五)には、『薩摩辞書』⁽³²⁾と呼ばれる日本で最初の活版印刷の英和辞書を同郷の前田献吉、前田正名

兄弟と共に留学の費用を作るために編集し、上海で出版している。大正七年十一月三十日付の公文書「正五位勲二等男爵高橋新吉特旨叙位ノ件」(「男爵高橋新吉特旨叙位ノ件」、『叙位裁可書・大正七年・叙位卷二十七』、国立公文書館、叙00571100)と題された公文書に記された同氏の紹介文によれば、「明治三年自費ヲ以テ海外留学申付ラレ在留四年ニシテ帰朝」とあり、その志を全うしたことが伺える。³³その後、当時の租税寮に出仕したことを皮切りに官僚として活躍した。

実は、梧陵と高橋との不思議な縁を感じるのはニューヨークでの客死だけではない。小泉八雲と服部二三の運命的な出会いの場となったニューオーリンズで開催された「万国工業兼棉百年期博覧会」³⁴への参加を実現させたのは、高橋の本博賛同を勧説する複数の長文の書簡(一八八四年一月二日付、同年三月二十日付外務大輔吉田清成宛)であったという。³⁵

また、帰国後は官僚から転じて九州鉄道会社長として十数年勤め、貴族院議員に任ぜられた後、明治三十二年には日本勧業銀行頭取と華麗な転身を遂げている。

六、日本の近代化と濱口家

滞米中の梧陵の行動がわかる資料は、『梧陵伝』にも引用されているが、明治十八年(一八八五)五月二十五日付の『交詢雑誌』³⁶に掲載された福澤に宛てられた書簡しかない。そのため、ここからは筆者の想像を含めて考察する。梧陵と同じ船に乗船した「愉快な仲間」は、仏国リヨン領事館に赴任の途にある官僚と日米貿易を円滑に進める為に紐育領事館に赴いた大蔵官僚或は為替取引などの知識がある銀行員だったということになる。日本における産

業の近代化の礎石になったのは、国立銀行の創設と西欧文化の一環としての複式簿記方を会計制度の基盤として導入したことだったと言われるが、彼らを通して梧陵は日本の未来を見据えていたのではないか。

しかし、梧陵と関わった人物の多くが後進の為の教育機関を創設していることから、梧陵が最も興味を持っていたのは、アメリカでの教育の現状ではなかったのだろうか。福澤の書簡から、梧陵が福澤の信頼するシモンズ医師の故郷ポーキプシー(Poughkeepsie)を訪ねていることがわかつている。そこには、森村豊が実践的ビジネスを学んだイーストマン・カレッジがあり、帰国後に「耐久社」で実践するために視察していたとしても不思議ではない。梧陵の息子担氏もそうだが、梧陵が高島小金治にサンフランシスコからニューヨークに向かう汽車の中で語ったとされる「移民論」⁽⁴⁰⁾に込めるように、濱口家からも事業の為に海外に学び、欧米に関するビジネス書⁽⁴¹⁾を出版する人物も出てくるなど日本の近代化に順応していった。実業家として成功したのが九代濱口吉右衛門(容所氏)で、その活躍は電力開発(九州電力、猪苗代水力電気)、紡績(富士紡績)、銀行(豊国銀行)、植林と幅広いものだった。また、梧陵の孫にあたる十代濱口儀兵衛(梧洞氏)は、吉右衛門の勧めで、帝国大学理学部(化学専攻)を一年で退学し、鐘淵紡績の技師の洋行に伴われて世界漫遊の途に登っている。帰国後、その才覚でヤマサ醤油の事業基盤を盤石なものにしていくのである。

注 釈

(1) 杉村廣太郎著『楚人冠全集 第七卷』日本評論社、昭和十二年。

(2) 突組をひきいて有川湾にやってきたクジラ突きは、湯浅の庄助や平次、古座の三郎太郎、広の又左衛門、藤代(白)の久左右衛門などである(辻唯之『五島のクジラとり物語』)。奈良尾町(広川町と姉妹関係)には、慶長の頃(一五九六―一六一四)より、同町において釣漁を営む紀州広村の漁師集団の記録がある。寛延の頃(一七四八―五〇)、同町において鯛漁を営む紀州広村の戸田長兵衛、久

徳六部兵衛、岩本若左衛門、鍵屋市部兵衛、安田七兵衛、高浦権次郎の記録がある。寛永二年（一六二五）から万延元年（一八六〇）に至って、この地妙典無縁墓地に眠る百五十余基の紀州広村の漁師の記録がある。以上、法村剛一『夕映えの海―五島と紀州の漁師―』（昭和堂印刷、一九八九）。

(3) 古式捕鯨発祥の地とされる太地は、当地の豪族、和田家一族の忠兵衛頼元が尾張師崎（知多半島）の漁師・伝次と泉州堺の浪人伊右衛門とともに捕鯨技術の研究を進め、慶長十一年（一六〇六）太地浦を基地として大々的に突獲り法の捕鯨を始めた。「和田浦」の和田は、和田一族の名前に由来すると思われる。その他、南房総には勝浦、白浜など紀州と同じ地名が多い。

(4) American Oil & Gas Historical Society 242 「First American Oil Well」を参照のこと。

<https://aoghs.org/petroleum-pioneers/american-oil-history/>（最終閲覧2019年10月27日）

(5) 後藤乾一「ジョン万次郎・平野廉蔵と小笠原諸島」、『1. 洋式捕鯨の導入』、『アジア太平洋討究』No.29, 3頁を参照のこと。

(6) 『池田村誌』（池田公民館、一九六〇）には、陸奥宗光と共に「高橋市右衛門」という人物が渡米したことが記されている。濱口梧陵と一緒にとも記されているが、これは事実でない。また、羅府新報など邦字新聞には「高橋彌太郎」という人物が陸奥に伴われて渡米したことが記されている。「紀伊藩」の留学生との表記もあるが、当時和歌山藩から派遣された留学生の記録はない。また、梧陵が米国の高橋邸で逝去したとの記述もあるが「梧陵伝」で伝えられている事実とは異なる。

(7) 千葉県佐倉の順天堂二代目当主の佐藤尚中の長男として嘉永六年（一八五三）に生まれる。叔父は、外交官として名を馳せる林董。なお、「オーシャニック・クラブ」のメンバーは、新井領一郎（商法講習所一期生、生糸輸入）、森村豊（森村市左衛門の弟、紐育森村組）、伊達忠七（三井物産）、鈴木東一郎（丸善店員、慶應義塾出身）、増田林三郎（製茶貿易）である。

(8) Daily Alta California, December 27, 1876 'Famous Passage of the "Oceanic"'.
Daily Alta California, September 8, 1876 'Quickest on Record'.

(9) 明治三陸地震津波の直後「ドリーリック (Doric) 号（一八九六年七月五日ホノルル着）でハワイでの療養に入る。『やまと新聞』一八九六

年七月七日付記事。

- (10) Daily Alta California (発行期間一八四九年十二月十日～一八九一年六月二日)は作家マーク・トゥエイン(Mark Twain)との関係で有名な桑港で発行されていた新聞である。津本陽著『椿と花水木』(幻冬舎文庫、二〇〇九)では咸臨丸の桑港到着などを報じた新聞として記されている。この新聞の一九二三年以前の記事は以下のサイトで閲覧できる。California Digital Newspaper Collection, Center for Bibliographical Studies and Research, University of California, Riverside.

<https://cdnc.ucr.edu/>(最終閲覧2019年10月27日)

- (11) Palace Hotel(現在のパレスホテル)は、一九〇六年のサンフランシスコ大地震の後に建て替えられたもの。ホテルの建物は地震には耐えたようだが、その後発生した大火で焼失した。

- (12) 天保九年(一八三九)～明治二十七年(一八九四)。薩摩藩士、外交官、政治家(滋賀県令)でもある。後藤象二郎や坂本龍馬らの工面した資金でイギリスに密航留学する。イギリス公使・パークス襲撃事件でパークスを救う。号は桜洲(桜州山人)。別名は、横山休之進、鮫島雲城、後藤休次郎、田中幸介、中井弘蔵であり、書家としても知られる。鹿鳴館の名付け親でもある。著書に『合衆国憲法略記』(松原岩次郎、一八八三)、『西洋紀行航海新説』(堺屋仁兵衛、一八七〇)、『魯西亞土耳其漫遊記程』(避暑洞、一八七八)などがある。逸話が多く、明治の怪傑、奇人、滑稽家として知られた(「徳富蘇峰記念館」書簡検索資料)。

- (13) 元々堂書房を創業、児童教育の図書などを出版する。早稲田大学初代図書館長市島謙吉などと交友があった。一時、東京市議を務める。

- (14) 一八四一～一八九一。肥前長崎出身の明治時代の官僚。通称は英輔。元オランダ通詞で民部省に入り、外務大録(だいさかん)、通商大佑に進む。明治四年伊達宗城らに従い清に渡り、日清修好条規締結にあたる。在清初代領事、総領事をつとめ、十七年農商務省に入り、通商局長となる。その後実業界に転じた。

- (15) アーネスト・サトウ(Ernest M. Satow)と共に外交官として横浜にいたシーボルト(Philipp Franz von Siebold)の長子アレクサンダー

ー(Alexander)と思われる。次男ハインリッック(Heinrich)は当時オーストリア公使館書記官を務めていた。

(16) 明治十一年(一八七八)、榎本武揚駐ロシア公使が、ロシアでベルシャ国王(ガージャール朝第四代ナーセロッディーン・シャー)および総理大臣と会見したが、明治の日本とベルシャとの交流のきっかけとなった。特使派遣を知らせる井上馨外務卿からベルシャ外務卿への通牒(一八八〇年四月一日付)によれば、この榎本公使とベルシャ国王との会見をきっかけとして、両国間に通商協定を結ぶ機運が生まれ、交易の準備として商況調査のための使節団が派遣されることとなった。特使に選ばれたのは、外務省御用掛の吉田正春である。吉田は幕末の動乱に際して土佐藩の改革にあたった吉田東洋の息子で、東洋が土佐勤王党によって暗殺された後は後藤象二郎のもとで育てられた経歴をもっており、幕末から明治初期にかけての動乱を体感してきた人物である。使節団には、参謀本部から派遣された古川宣譽陸軍工兵大尉、大倉組副社長の横山孫一郎と同社員の土田政次郎、七宝焼陶器や小間物、金銀細工の商人が参加した。使節団の国王謁見など詳細は、次の外務省「外交史料館」を参照のこと。

https://www.mofa.go.jp/mofai/ms/da/page25_000037.html(最終閲覧2019年10月27日)

(17) 「中東における石油——明治大学」を参照のこと。

<http://www.isc.meiji.ac.jp/~tomiyam/topics/topics11.html>(最終閲覧2019年10月27日)

(18) 和田豊治は、同じ中津出身の「日米貿易の先駆者」と呼ばれる甲斐織衛の興した「甲斐商店」サンフランシスコ支店でも働いていた。

(19) 『福澤諭吉書簡集』第九巻(岩波書店 二〇〇三)二六六頁を参照のこと。

(20) 一八四二～一八〇五。第三代慶應義塾塾長。

(21) 一八三九～一九一九。森村財閥の創設者の六代目市左衛門。武具商、陶磁器業などを営んだ森村家の歴代当主が市左衛門の名を襲名した。現ノリタケカンパニー、東洋陶器(TOTO)、日本椅子を設立した。明治二十二年(一八八九)に、ニューヨークでは横浜正金銀行出張所で正式に為替の取り扱いが開始される迄、個人への送金は森村組が代行していた。従って、梧陵への送金は森村組を通して行われていたと思われる。なお、一八八五年四月十一日付「Rockland County Journal」に「The Japanese in New York」に

いう記事がある。十六年前から日本政府が米国に送り出した学生は、およそ二五〇人。岩倉使節団の米国視察がビジネスマンの渡米にきっかけとなるが、特に米国建国百年を記念した一八七六年の万博が大きな影響を与えた。当時、ニューヨーク在住の中国人が三千人、日本人は全米で二百五十人であった。個人での渡米は極めて稀であったことがわかる。

- (22) 一八五四～一九三六。吉田藩(伊予国)御船手生まれ。十六歳の時、村井家の養子に、理解ある義母により学問への道が開ける。二十四歳の時、慶應義塾に入學、福澤諭吉の教えを受ける。卒業後、森村市左衛門翁の経営する貿易商社森村組(現森村商事)に入社する。以来、渡米九十回、太平洋上にあること九年、持ち前の情熱と誠実さで活躍する。六十七歳の時、養母の恩を村井幼稚園開設と云う形に、旧制吉田中学校(現愛媛県立吉田高校)開校に尽力する。校訓は同氏による(吉田高校創立者 吉田三傑「吉田高校提供資料より」)。

- (23) 『福澤諭吉全集』第17卷(岩波書店一九六一)、書簡番号六五七、六六八―六七〇頁を参照のこと。

- (24) デュアン・B・シモンズ(Duane B. Simmons, 1834年―1889年)は医師でアメリカ・オランダ改革派教会が日本に初めて派遣した宣教師の一人である。明治四年(一八七二)六月二十三日付「大学東校へ日耳曼列国医師シモンズヲ雇用ス」によれば、遺された書簡から梧陵とも紀州藩の兵制改制などを通して交流のあったと思われる獨逸書記官ケンブルマンの紹介もあり、大学東校に迎えられることになる(期限付の短期雇用だったようだが、給料一月四百弗とある)。明治三年に発疹チフスで苦しんでいた福澤諭吉を治療したことがきっかけで、シモンズと福澤は生涯親交を厚くした。

- (25) 『福澤諭吉全集』第17卷(岩波書店一九六一)、書簡番号六五八、六七〇―六七二頁を参照のこと。

- (26) 金子彌平(一八五四―一九二四)は、現在の岩手県花巻市の商家に生まれる。明治五年(一八七二)の春単身上京し、福澤諭吉の書生となり、翌年慶應義塾に入る。満州開拓者、実業家。興亜会や黒龍会といったアジア主義団体に幅広く通じたナショナリストの魁的な存在である。同書の抄訳である『支那總説』(全三卷)という啓蒙書を刊行する(明治十四年十二月)。梧陵の銚子にある君碑の撰文をした重野安繹が序文を書いている。大蔵省の実力者であった松方正義の知遇を得た。梧陵が見せられた本は支那研究者・宣

教師 Samuel Wells Williams [1814.9.22-1884.2.16] の “The Middle Kingdom” と思われる。

(27) 金子宗徳氏(当時姫路獨協大学法学部講師)の記された「ある明治のキリスト者―金子勤三の生涯」を参照のこと。

<http://terget3zoku.com/sektei/2008/note/2007/note23.html> (最終閲覧 2019 年 10 月 27 日)

(28) 『時事新報』一八八四年三月二十五日付 「米国は志士の棲處なり」

「米国の富榮世界第一たる理由は、千萬里の沃野に放つに有為活潑の人民を以てしたるに在るや甚だ明白なるべし。今や米国の富源の未だ人間の開發を経ずして空しく天地の間に遺棄せらるゝ者尚ほ幾許あるや知るべからず。自今以後世界各國有為の男女、西より東より北より南より相競ひて此美國に來集し、其心身の働を逞することあらんには、今の富榮に又幾層の富榮を重ね、遂に何様の程度にまで達すべきや豫めこれを図り知るべからず。米国の前途は春如海と云ふべきなり」

『時事新報』一八八四年四月十六日付 「富を作るの地を擇む可し」

「爰に少しく限界を廣めて海外諸國を見渡せば、其繁盛活潑の度、我國の都會に幾倍するものある知らず。此點より考ふれば我東京の如きも、我國にてこそ無雙の都府となれ、之を海外の大都會に比較すれば或は東洋の人田舎として見るも可ならん。果して然らんには、金を儲けるの機会も、此田舎に少なくして彼の大都會に多きこと明白なり。特に北米合衆國の如きは、事物日新の國にして、商工農事の活潑繁劇なる、世界に其比を見ざる程の次第なれば、機会に乗じて暴富を成すもの甚だ多く、當時米國有名の金穴ゴールド氏等の如き、十年前迄は實に天秤棒一本の身分なりし者が、一たび手に唾して風雲に乗ずれば、富を得ること中の物を拾うが如く、今は數千萬の身代となりて民間の萬戸侯たるに至たり」

『時事新報』一八八四年七月一日付 「富貴功名は親譲りの國に限らず」

「東方に國あり、アメリカと云う。國新しくして人少なく、土地廣くして氣候美なり。農業、工業、商業ともに仕事澤山にして賃銀高く、親譲りの門閥もなく財産もなく、唯一ツの己れの腕前を恃み安く此世を渡らんとするには、最も都合よき國柄なり。殊に其國の政治の仕組は合衆共和政治として、人民の投票にて四年目毎に中央政府の大統領を撰び、國會上院の議員も撰び、下院の代議

士も撰び、下て各州の知事、州會議員、判事、行政官吏に至るまで、人民の撰舉に出るも甚だ多く、政治上の仕事年中絶え間あることなし。投票は多數に決する規則なるゆゑ、若し此方さへ多くば、此方の好きな人物を、議員に出すも知事に舉るも、時の都合次第、勝手次第なり。或は今少し奮發して、己れ自ら議員、知事と為りて、議政為政の大権を握るも勝手ならん」

- (29) 『和歌山県史 前記』(和歌山県史前記、和歌山藩史、政治藩治・外国人傭使・工業・賑恤・祭典・戸口・風俗・学校・時変(明治2-4年)」、国立公文書館、請求番号…府県史料和歌山)の「外国人傭使」、「学校」の記述によつて「共立学舎」で講師となった「サンダルス」との雇用契約(明治五年十二月とあるが、元号と西暦が併記されていることも注視すべきかと考える)。その契約内容の詳細と開塾の日付も確認できる。

- (30) 福沢は二度目(一八六七)のアメリカ行きに際し、諸藩(仙台藩、紀州藩とされる)からも資金を預かつて大量の書籍を買い集めた。紀州藩から依頼されて購入した一冊が、マンドヴィルのリーダー第5読本(Mandeville's fifth reader for common schools and academies)。表紙見返しに、鉄砲州時代からの慶応義塾塾生である小川駒橋の識語があり、「当時英書ノ我国ニ舶来スルモノ乏シク学生等ハ多ク謄写シテ講読」していたので、紀州藩が二百両を福沢に託し、福沢塾に学ぶ紀州藩士の塾生のために書籍を買い集めることを依頼した。福沢は紀州藩のために百数十部の書籍を買つて来たが、それによつて紀州藩士の塾生の「学業俄然面目ヲ新ニシ」たという。なお、小川駒橋は湯川秀樹博士の祖父にあたる。マンドヴィル読本はその後紀州藩の藩校を経て(紀府観光館印)という印記がある)、南葵文庫に収められ、関東大震災後、東京大学総合図書館に移された。(東京大学付属図書館、特別展示会「東大黎明期の学生たち―民約論と進化論のはざま―」展示資料一覧から)。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/html/tenjikai/tenjikai2005/tenji/index-chnl>(最終閲覧2019年10月27日)

- (31) 一八三七〜一九〇一。岩村藩医で明治初期の日本の実業家、医師、官吏。丸善(現ジュンク堂書店を含む)、横浜正金銀行の創業者として知られる。一説には、「ハヤシライス」の名前の由来とされる。

- (32) 開成所版の英和辞書をもとに編集し、上海に渡つて印刷・発行された。『薩摩辞書』と呼ばれて当時広く利用され、明治二年(一八六

九)には『増補和訳英辞書』として増刊された。なお、『和譯英辭書』が、初版における正式名称である。鶴丸城跡地の一面に鹿児島県立図書館があり、その正面入り口に《薩摩辞書之碑》があり、『AN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY 薩摩辞書之碑 American Presbyterian Mission Press 1869』と刻まれている。幕末の大混乱のさなかに密かに上海で刊行作業が進行し、維新後に完成をみた大冊の英和辞書である。いかに衰微していたとはいえ、幕府の正式な許可を得ないまま、薩摩藩庁から資金提供をうけて刊行に着手した薩摩藩の若き俊才たちは、正式な刊記(刊行記録、現代の奥付)を残すことなく、記録として、日本語序文に「日本 薩摩学生」とだけが記されている。「薩摩」と記しても、薩摩藩とは記さず、万一追求をうけても「藩とは全く関わりがない薩摩の若い学生が勝手にしたこと」として、釈明の余地を残したと思われる。しかし、資金面からも、これだけの大冊の辞書を、鎖国下にあつて海外渡航も困難だった状況から、上海の印刷所で「日本 薩摩学生」が刊行できたとは思えない。薩摩藩の藩命による援助があつたと思える。

(33) 明治五年十一月三日付「米国留学生高橋新吉学資金ノ儀ニ付伺」によって同氏と前田献吉の留学費用を官費によって賄うことが検討されていたことがわかる。

(34) World's Industrial and Cotton Centennial Exposition [1854.12.16-1885.6.1]

万博には服部二三と共に高峰讓吉博士が事務官として参加している。服部と同じく、この時にハーンと会っている。高峰博士は、後に大倉喜八郎や渋沢栄一らと「東京人造肥料会社」を設立する。新薬「タカジアスターゼ」の製造を発明し、現第一三共の初代社長を務める。偶然だが、安政東南海地震の前日(安政元年十一月三日)に生まれる。

(35) 平田諭治「1884-1885年ニューヨーク万国博覧会における日本の教育の紹介」[2. 日本政府の参同と対外感]〔筑波教育学研究〕2号、五頁)を参照のこと。

(36) 明治十三年(一八八〇)二月五日に、先に発会された「交詢社」(常議員長福澤諭吉、常議員副院長西周、幹事小幡篤次郎)の機関誌として発行された。創刊当初は四六判、分量はおよそ二十から三十頁前後で毎月五日、十五日、二十五日の三回発行された。創刊

当時の『交詢雑誌』は市販されず、社員のみ配られた。なお、『交詢雑誌』は明治三十四年四月二十五日発行の第五七一号を最後に休刊ないし廃刊されている。

(37) 政府は、全く新しい構想を下に、近代的諸産業発展の基礎となるべき金融機関を創設し、財政上の必要から乱発した巨額の不換紙幣の整理を行うことを当面の目的として、明治五年十一月に「国立銀行条例」を制定した。この条例に準拠して明治六年六月開業免許が交付され、明治六年七月に開業した第一国立銀行は、三井組と小野組が中心となって設立されたものだった。第一国立銀行の資本金は、一二四万八百円(三井、小野の出資二百万円と公募)。その後、中央銀行制度を採用とする財政金融政策の大転換があり、明治十五年(一八八二)十月に日本銀行(明治十年「日本銀行設立ノ儀」松方正義)を設立し、国立銀行制度の廃止が決定する。

(38) Eastman Business College 一八五九年 Harvey G. Eastman によって創立された。

(39) 濱口(田島)担。梧陵の長男として一八七二年に生まれる。明治四十三年当主儀兵衛家から分家する。同二十四年慶應義塾卒、同二十七年早稲田大英語政治科卒。同三十五年英国ケンブリッジ大学経済科卒。帰朝後、同三十六年参議院議員(和歌山)、豊国銀行設立に関わり文書部長を務める。同四十五年猪苗代水力電気会社創立に際し、庶務営業課長となり、大正九年監査役を務める。同十一年東京電燈と合併ともに辞職し、麒麟麦酒監査役となる。近藤廉平氏の娘八重子と結婚する(『人事興信録』第4版、人事興信所編、一九一五、『人事興信録』第8版、人事興信所、一九二八参照のこと)。

(40) 「米国の土地沃饒にして遺利多しと豫て聞き及ぶたる事なるが、今之を目撃するに及んで、其の聞きしに優れを覚ゆ。然るに我が国の人々にして渡航するもの、何れも滞留僅に二三年乃至五六年の短期間に過ぎず。匆々にして帰り来り、土地狭く人口多き国内にて再び食を争うが如きは、余りに量見の狭きものと云わざる可らず。氣力なきか、忍耐なきか、働なきか、資財なきか、何等かの缺乏するものがあるが為なるべし。渡米の希望なきか又は渡米する能わざるものは姑く措く。苟も然らざる限りは、此處に來りて耐忍勉勵せば、必ず巨利を占め、大志を遂げ得べし。今老生の如き、漸く此處に來ると雖も、恨むらくは前途短くして為すべき事なし。故郷に於ける有為少壯の士の奮って渡航し來らん事を望んで止まず云々。」(明治十八年六月十七日『和歌山日々新聞』記事及

び『濱口梧陵伝』から。

(41) 濱口吉右衛門著『欧米日本商工政策』(博文館、明治三十四年五月)。

参考文献

啊爾哩温度(アラン・シャンド)述、海老原濟、梅浦精一訳『銀行簿記精法』(大蔵省、一八七三)。

愛媛県立吉田高等学校『創立90周年記念誌』(二〇〇七)。

大倉喜八郎述『努力』(実業之日本社、一九一六)。

大津忠彦「明治期先覚者吉田正春とその事績―「考古学」および「西アジア」の視点より―」(『筑紫女学園大学・短期大学人間文化研

究所年報』18号、一五七―一六九頁、二〇〇七)。

金子宗徳「金子彌平―ある明治人の軌跡―」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊第42号、六九―一〇六頁、二〇〇五)。

慶應義塾『福澤論吉書簡集』第九卷(岩波書店、二〇〇三)。

慶應義塾『福澤論吉全集』第17卷(岩波書店、一九六一)。

後藤乾一「ジョン万次郎・平野廉蔵と小笠原諸島」(『アジア太平洋討究』17029、一―二二頁、二〇一七)。

阪田安雄『国際ビジネスマンの誕生 日米経済関係の開拓者』(東京堂出版、二〇〇九)。

杉村廣太郎『濱口梧陵伝』(日本評論社、一九三七)。

瀬川光行『商海英傑伝』(富山房、一八九三)。

耐久高等学校同窓会『耐久』四十三号(二〇一九)。

銚子木国会『銚子木国会史』(兪書房、二〇〇二)。

辻唯之『五島のクジラとり物語』(長崎新聞社、二〇一五)。

鍋倉直『国立銀行簿記一斑』（木島文六、一八七九）。

野村由美「黎明期における各国商業教育の成立事情——比較考察のための覚書——」（一橋大学創立150年史準備室ニューズレターNo.3、二〇一五、二〇一七）。

平田諭治「1884—5年ニューオーリンズ万国博覧会における日本の教育の紹介」（『筑波教育学研究』2号、一一一六頁、二〇〇四）。

ピネオ『ピネヲ氏原板英文典直譯 慶応義塾讀本』（尚古堂、一八七〇）。

福澤諭吉譯『帳合之法』（慶應義塾出版局、一八七三）。

松下鈞「福澤諭吉とビブリオテーキ」（『帝京大学総合教育センター論集』vol.3、110—11）。

『ヤマサ醤油店史』（ヤマサ醤油株式会社、一九七七）。